

## 【キーワード】

〔施設種別〕  高齢者施設  障がい者施設  子ども施設  住宅 ( )  
 〔運営主体〕  市区町村  法人  NPO  個人 (補助金)  内閣府  国土交通省  厚生労働省 ( )  
 〔建物形式〕  1 棟単体型  複数棟集合型  団地型 (建物状況)  新築  増築  改修  一部改修  既存  
 〔対象者〕  高齢者  障がい者  子ども  ファミリー  多世代

写真1. 日本海倶楽部からみる日本海<sup>1)</sup>

障害者への働く場の提供と、地域の産業興し、定住人口の確保、等の地域と人々の生活における複合的な問題解決の一手法である。能登半島の先端にほど近い能登内浦の高台に、障害者のための小舎型生活施設を核として、地ビール工房、地ビールを提供するレストラン、牧場(ミニ動物園)等を運営し、能登半島の新しいリゾートエリアを提供している。

見学月日：2019年3月4日

見学者：山田，松原，小篠，瀧崎，出口，古賀政好，  
土田，佐藤栄治，古賀誉章，加藤，斎尾  
葛原，梅津，目黒，五ノ井

## ■施設概要

<利用定員>

施設入所支援：30名

就労継続支援B型：20名

生活介護：40名

<日本海倶楽部ザ・ファーム，就労関係利用定員>

就労継続支援A型：20名

就労継続支援B型：20名

業務内容：弁当製造，高齢者向け配食事業(能登町委託業務)，農産加工品製造・販売 平均月額72,167円

\*訪問時の就労利用者は126名，正職員40名。

<生活支援ネットBe 日本海倶楽部ステーション>

サービス内容：

児童発達支援

放課後等デイサービス

短期入所

共同生活援助(グループホーム)：5カ所，各定員5名

移動支援



図1. 位置と周辺環境(googlemapより)

能登半島の先端に位置し，周囲は森に囲まれ，目の前には日本海が広がる場所に位置する。



写真2. 日本海倶楽部の外観



写真3. クラフトビール

レストラン棟の入口ホールから、ガラスを介して醸造の様子が見られる。



写真4. 居住施設（中はグーグルストリートビュー、下は佛子園 HP<sup>1)</sup>より）

住まいとなる施設は、上：木造のロッジ風の個室小舎4棟（計32名定員）と、中、下：ケア付き住宅棟（中規模施設）の両方がある。この日本海倶楽部は「仕事の場」をベースに「生活の場」が整備された施設なので、基本的にここに生活する人の全員が働くことが想定されていた。加齢などによって仕事ができなくなった入居者も出てきており、これからの課題。

日中一時支援

<連携するグループホーム>

定員5名が5カ所

日本海倶楽部は、もともと重度障害者を対象とする児童施設や更生施設が中心であった佛子園が初めて取り組む本格的な授産施設として、1998年5月にスタートした。

## 1. 設立の経緯

### ■設立までの流れ

社会福祉法人佛子園のお膝元である小松や、シェア金沢(→事例051)のある金沢は人口集積のある都市であるが、石川県の北部、奥能登は過疎地であり、そこで障害者が生活をしようとする、地域から仕事をもらうことができないという事情がある。そこに住んでいる人々であっても仕事がなく、出稼ぎに行く人が多いという地域であ

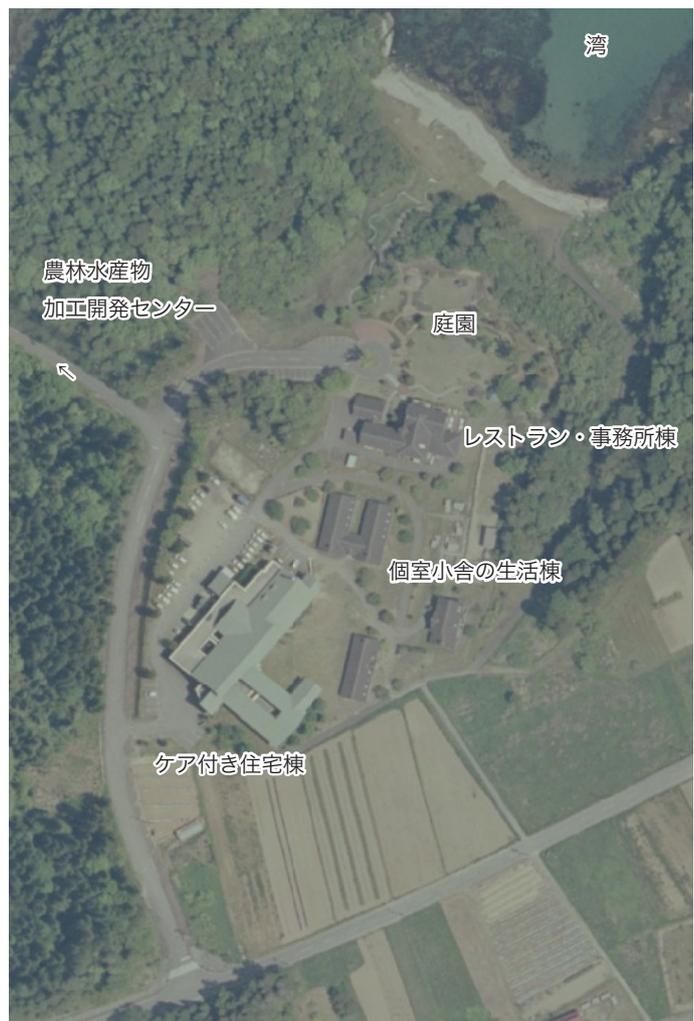


図2. 敷地内配置図（国土地理院空中写真）

る。そこで、奥能登の地に障害者の生活施設をつくろうとしたとき、その地域に、障害をもった人と地域の人と一緒にすることができる職場を作った。

昭和 35（1960）年に宗教法人「行善寺」より土地・建物の寄付を受けて障害児の児童養護施設「佛子園」開設後、子供たちの成長と巣立ちとともにグループホーム等を設立して成人の生活の場を地域につくってきた。しかしさらに、日中に成人が過ごせる場所、入所施設がないことが課題と認識されるようになった。そこで、1988年に開墾した辰口町和気（現・能美市和気町）の丘陵地に、平成 7（1995）年 4 月に星が岡牧場（→事例 867）を開設した（種別としては障害者授産施設で、定員 50 名）。その後、就労支援事業の拡大とともに、どのような業務を拡大していくかの検討を進めた。よくある就労支援事業としては「箱折り」などがあるが、こうした業務は人と接する機会がない。そこで、「何かを作る」ということと、「その過程で人と接する」ということを重視し、ビール事業を始めようとなった。当時、橋本内閣の政権で地ビールブームだったので、小ロットで製造でき、付加価値もつけやすく話題性やニーズが見込める地ビールの工場をつくることになったのである。なお、社会福祉法人が就労支援の場をつくるということで、酒税も免除されることを期待していたがそのような優遇はなく、今日本海倶楽部では 2000 万円ほどの酒税を収めており、障害者の雇用を通じて産業創造や税制にも寄与することができている。障害を持った人が、仕事を通じて国に納税できるようになったということは、画期的だと考えている。

## ■立地と事業概要

施設が建っているのは能登半島のほぼ先端である。見附島や恋路海岸、九十九湾海中公園等が近くにあり、ゴールデンウィークや夏には多くの観光客が訪れるスポットとなっている。そんな自然に恵まれた土地の新たな観光名所（地ビール工場）となり、地域福祉の拠点ともなる施設をめざすという理想のもと、「ヒーリングベイエリア」日本海倶楽部を設立した。これは、障害者の生活施設等を周辺地域から切り離されたコロニーとして計画するという従来の方法とは一線を画すものであった。

「日本海倶楽部」の取り組み事業は、地ビール製造だけでなく、ビール工場にレストラン「Heart&Beer・日本海倶



写真 5. 日本海倶楽部のビール

左からピルスナー、ダークラガー、ヴァイツェン。昔から能登地域は発酵文化が根付いた地域であった。酒蔵やワイナリー、焼酎蔵の他、鯛やイカのはらわたを発酵させて作る能登伝統の魚醤「いしり」などがその例である。佛子園は、発酵製品が作られてきた地域の文化に則った事業として、障害者就労施設の作業品目としては珍しい「地ビール」製造を始めた。

日本では最も格が高いと考えられている鳥「トキ」をロゴマークにしている。トキは日本海倶楽部ができた 1998 年には、日本国内では一度絶滅してしまっていたが、かつては日本本土では能登に生息していた。「日本で最上級なビールを作ろう」という趣旨の元、トキをロゴマークに採用した。つくられているビールの品質にも自信を持っており、ブルワリーオブザイヤーを二年前にもらった。いまは県内外の 170 数店舗に「クラフトビール」として卸している。かねて、こうした生産品を提供する場も増やしたいと思っており、この後につくられた山草二木西園寺（→事例 052）やシェア金沢（→事例 051）、三草二木行善寺（→事例 412）などでも日本海倶楽部のビールを提供している。

## 参考文献

- 1) 社会福祉法人佛子園, 日本海倶楽部, <[http://www.bussien.com/nihonkai\\_club/index.html](http://www.bussien.com/nihonkai_club/index.html)>
- 2) 日本海倶楽部, <<http://www.nihonkai-club.com/index.shtml>>
- 3) 社会福祉法人佛子園, 生活支援ネット Be 日本海倶楽部ステーション, <[http://bussien.com/nihonkai\\_club/be.html](http://bussien.com/nihonkai_club/be.html)>
- 4) 日本海倶楽部ザ・ファーム, <[http://www.bussien.com/nihonkai\\_club/farm.html](http://www.bussien.com/nihonkai_club/farm.html)>

楽部」を併設し、レストランの経営も行っている点が特徴的である。チェコ人のブラウマイスターを迎えて製造される本格的な地ビールを、海の見える素敵な空間で味わうことができる。地ビール以外にも、魚介パスタや能登牛の炭火焼き、オーブングリルで焼き上げる地鶏の丸焼きやケバブ等が味わえる。

また、建物の周りは農園や緑豊かな公園となっており、海を望んだ滑り台や、ミニチュアホース、エミュー、ミニブタ等が飼われたミニ動物園もあり、天気の良い日にはのんびりとした時間を過ごせる場所となっている。

## 2. 日本海倶楽部での生活の様子

佛子園では、「仕事と生活」を分けることを重視しており、仕事を行う棟と、生活棟は分離されている。職住分離によって仕事とプライベートにけじめをつけることができる。これは、自立支援法において生活の場と日中活動／就労の場を分離することが基盤となっていることと合致する。また、「ノーマライゼーション、ソーシャルインクルージョン」の思想のもと、障害のある人たちが施設の中でも主体性をもって生活や活動ができるように仕組みづくりを行っている。

ノーマライゼーションや主体性の尊重のためには、自己決定と自己実現がまず大事であると考え、「本人が選択をする機会」が日常生活のなかで多くあるように配慮している。例えば昼食も麺類・丼・カレーライス・定食等 15 種類ほどの中から選んで食べてもらう選択型にしている。なにか一種類のを食べ続けるのも選択であり権利であるので、それを否定することはない。また、障害があってもできることはそれぞれがやるということも、前提となる。旅行に行くときにも、40 人の職員のうち 20 名が旅行のプレゼンをして、キャンプやユニバーサルスタジオなどの示された候補の中から行きたいところを利用者が選ぶ。そして、行きたいところに行きたい人が職員と行く。

隔週水曜日運行するシャトルバスでの外出支援では、専属ヘルパーさんの運転のもと、仲間たちとショッピングに出かける。余暇の活動も充実している。

比較的自立度の高い、小舎 4 棟の居住者は、ヘルパーのサポートのもとで自分たちの考えたメニューをもとに朝・夕の食事作りを行う。

## 3. 支援、事業の内容と周辺との関係

能登は超過疎地域である。能登町の高齢化率は 48% で全国平均から比べても高く、障害者のための福祉サービス提供している事業所もない。この地域で障害者福祉支援の事業を行っているのは日本海倶楽部くらいであるので、ここで全世代をみる必要がある。

### ■事業の内容

利用者には、各種の事業から参加したい仕事を選んでもらっている。

- ・ファーム事業：3 ヘクタールの農園で、ブドウやかぼちゃ（手間のかかる品種：量ではなく付加価値を重視。昨年度の収穫は 9000 個）。年間を通しての仕事量の上下が激しいため他の事業との組み合わせが有効。
- ・公園整備：日本海倶楽部内の公園の花壇のお花や芝生の手入れ、落ち葉ひろいなど清掃、エミューやポニーなどの動物たちの世話。
- ・配食事業：高齢者向けの配食サービスや地元企業へのお弁当デリバリーサービス。レストランの食材の下ごしらえや盛り付け、洗いものなど厨房アシスタント、サーブなどの仕事にも従事する。
- ・ビール工場：軟水で仕込む、日本人の味覚と水質にも合うチェコの方法でつくっている。ラガー（下面発酵）のピルスナーが日本人には一番人気がある（世界的にはドイツの上面発酵タ

イプの方が圧倒的に人気が高い)。醸造の仕事は地元の人々にとっての雇用の場ともなっており、ビールづくりの各工程、麦芽や酵母などの材料搬入、醸造、瓶洗浄、ビール充填、出荷のそれぞれの段階で、可能な仕事に障害者の人々も従事する。

- ・自閉症の方を対象にしたワーク班：いくつかの企業からの受託業務。落ち着いた環境のもとで集中して作業できるように配慮されている。

施設の作業部門として、ビール製造、レストラン、動物&公園整備、農業の4部門が用意されており、利用者一人一人の適性や障害程度、そして本人の希望によって所属や配置を決定している。

「日本海倶楽部」の特色は、ビール製造やレストラン事業だけでなく、施設を取り囲むさまざまな仕事の利用者に用意されている点である。利用者らには、外で思い切り気持ちを発散したいタイプの人、人と接するのが大好きな人、一般就労へ向けた準備をしたい人など、様々なニーズがある。そのため、「日本海倶楽部」では、そのような働くことに対するニーズに応えている。

### ■農福連携と複合的事業展開

能登町では、一次産業である農業が基幹産業である。農業従事者も高齢化しており後継者不足のため、耕作地を保つことが難しくなってきたこともあり、障害者が農業に参加することは喜ばれている。「日本海倶楽部・ザ・ファーム」プロジェクトは、日本海倶楽部10周年を機に2008年春からスタートし、いまでは高齢者が障害者に対して農業のノウハウを提供してくれるという協力体制もできており、農業と福祉の連携「農福連携」ができています。「能登の農業の元気を取り戻す」ことを目標に、地元の人たちと障害者が一緒になり、使われなくなった畑地を再び耕し、老いも若きもすべてが共に生きるソーシャル・インクルージョン、ワークシェアの取り組みが成されている。このように社会福祉法人が農地を取得し本格的に農業に携わるのは、石川県内では初めてである。地域の人々と、また農業と福祉が一緒になって頑

張るという体制ができており、それには地域の人たちとの関わりが大きく、日本海倶楽部は「仕事」を通してつくり出されてきた。

能登地域は人口減少も著しく、今後の人口推移予測をみてもその傾向は続く。その地域で、一次産業である農業が衰えると地域が衰えてしまう。日本海倶楽部では農業を基盤とした地域の維持に力を入れている点が特徴で、さらにはそこから派生する「全てを賄って行く」ことがいまのあり方である。その一つが日本海クラブは農福連携による独自産業化である。農福連携は、農林水産省と厚労省のお互いのメリットを活かす取り組みである。1～3次産業を通して仕事を創出し、自分たちの独自の商品開発と製造を通して地域を活性化させる。加工方法など新しい技術に取り組み、地域の産業と連携して様々な業種や事業の種別を超えてイノベーションを起こすことが求められる。日本海倶楽部だけでも、一次のファーム、二次の加工工場、三次のレストランという六次産業を行っている。そして、加工工場は地域の人たちの雇用の受け皿となっている。

ファストフード店もこの辺りはなく、外食文化がない。そこで、日本海倶楽部がレストランを行っていることは地域にとっても貴重な場となっている。カルチャセンターや文化的イベントなどもないため、そうした場としての利用、機会の提供なども担っている。

### ■本物の事業、本物の製品を作る

インフラが減り、役場も統廃合されている。地域の魅力が低下し、人口減少と高齢化の折から、地域のお神輿を担ぐ人がいなくなっている。こうしたなかで、ビール工場は地域の魅力を維持して行くための一方策となっている。ビールは6500万/年ほどの売り上げがあり、日本海倶楽部全体では13,800万ほどの売り上げがある。こうした売り上げを、ここで働く障害者にバックすることができる。こうした事業のなかで取引先や関係機関との横つながりの連携ができるマネジメントによって、福祉・一般の「就労」から地域との繋が

りがつくられていく。「障害のある人をベースに0から1を作る」でなく、本物の産業、本物の商品、売れるものをつくるというPCMがあって、それに対して障害者をどうマッチングしていくか、という発想である。そこには、商品開発、商品製造と流通のルール（ビール樽は20リットルである、などの製品が作られ・売れる規模）など多様な要件があり、おいしければ良いというものではない。消費者のもとに届くよう、「売れるものなのか」「売れる仕組みがあるか」というマーケティングまでを一貫して行う必要がある。デザインはプロの人をお願いする、販路はそのルートを持つ会社に委託するなど、必要な能力のアウトソーシングやプロとの連携も必須である。

売れるものをつくる、本物の事業をつくることは「必要」だが、日本海倶楽部にとっては売り上げを伸ばすことが本質ではなく、障害のある人が役割を持てる仕事をつくること、自分たちに誇りを持てる仕事を持つこと、が最も大切な点である。ここで働く人々が、自分は社会に貢献し、認められているという実感を持つこと、また自分たちが住んでいるまちの将来を切り開き、になっているという感覚が自信や誇り、意欲に結びついている。

#### ■工賃について

工賃については、佛子園で定めている評価法がある。一番高い枠組みだと時給850円になるが、ここまでの工賃を出せているところはそうはないと思う。なお、福祉就労ではなく一般就労で働いている人も少しいる。また、A型の人にはパートとして働いている。B型にも最低賃金払えるようにということを考えている。生活保護が最低13～15万で、障害賃金は66000から88000円であるので、その差額となる5～6万/人の収入がないと、障害者の生活はきつい。ということになる。実際には、地域によっては(生活費の違いから)2～3万の収入でもぎりぎり生活できるが、現実の全国平均は1.5千円である。

## 4. 今後の展開

能登には障害者サービスの拠点が他にないため、障害児のデイサービスをがないため、車で10分弱の距離の「生活支援ネット Be 日本海倶楽部ステーション」で行っている。全国的な問題として、「障害8050問題」が懸念されており、これは親が80歳で50歳の施設等を利用してない、福祉の必要な人として登録されていない潜在的な障害者(要支援者)がいるということだが、これから親世代のケア力低下や志望により、顕在化してくると思われる。

行政は行政が規定しているサービスしかできない。一方で、社会福祉法人は多様なサービスのカードをすでに持っていて、さらにグレーゾーン、インフォーマルなサービスもいろいろできる。行政がになっているサービスを事業化できる可能性もあるかもしれない。

開設から時間が経っているので、小さい頃から佛子園で支援をしている人が40代、50代に達している。障害者は老化現象(筋力の衰えや嚙下能力の低下など)が早いともいわれており、入所施設では障害者の介護がこれからの課題となる。Be'sクリニックでは在宅の障害者や高齢者への医療提供を行っているが、これからはグループホームの利用者等にもこうした医療支援も必要になる。

日本海倶楽部は就労の場としてのコンセプトで運営しているので、この利用者はなにがしかで働くことになっている。「定年」という考え方はないが、これから高齢化が進んでくると「障害者の老後」の問題も出てくる。生活介護と就労支援は便宜上わけているが、いまは生活介護の人でも就労のような仕事もしている。これからは、高齢化に対応して屋内での活動も増やさないといけないと考えている。

(東京電機大学 山田あすか 2020.11.19)